

福澤の「婦人論」第5回 '10. 9. 11

『日本婦人論』後編 (その4) P.56 S P.71

1. 後編の執筆の意図

1. 讀者・同感の少く至るを直さう。

「この論の文章文字も少しく四角にして、新報読む人にはよく理會せらるゝも、広く他人へ話するときなどには不便利もあらんことを恐れ、今度は平仮名じりにて平たき文を綴り、前の婦人論の後編として世に公にせんとす。但し同じ事柄を表裏より繰返して言うことなれば、前編の文と重なる所もあらんけれども、それは記者の才の足らずし筆の拙なき故なりと宥し給わらべし。」 (P. 58)

ロ. 新しいニミエを、加えて之を古の習慣を打破す

「扱前編に婦人は男子と同様の身分にして同様の権利を持ち、財産身代として男子と同様に所有すべき筈なりとの次第を述べ、その趣意は誠に合点し易き道理にして疑うべきにも非ざれども、何分にも幾百年となく男子のみが我儘勝手にして婦人をはるるか無じしたる国の風俗なれば、今吾々の筆をもて道理至極の事を記すも、男子に於て不同意を言うのみならず、利益の正面に当る婦人迄も却て新工風を憚る者あるやも計るべからず。こは子飼の鯨が籠を出るを知らず、放れ馬が厩に帰るに等しく、一尺の籠状しと雖ども、二間の厩窟窟なりと雖ども、年月摺倒に養われ飼葉の味に慣れば、花に嘖り野に駈るの持前は之を忘却して、今の真実の苦痛を知らず、唯浅ましき次第と申すべきのみ。」 (P. 58)

ハ. 政府の偏私主義への、貞節への、節への

2. 男女の平等、その間に軽重貴賤の差別なし

「男女格別に異なる所は唯生殖の機関のみ。是れとても双方唯その仕組を異にするまでにて、孰れを重しとし孰れを軽しとすべからず。その外は耳も目も鼻も口も手足の働、臟腑の釣合、骨の数、血の運動等に至るまでも、都て体質に微塵の相違なきのみか、その心の働に於ても正しく同様にして、男子の爲す業にて女子に呼ぶざるものなし。」 (P. 59)

「左れば男女の釣合はその体質に於てもその心の働に於ても異なる所は更になくして、正に平等一様のものたるは争うべからざるの事実ならん。人は万物の靈なり」と云えば、男女共に万物の靈なり、男子なくしては国も立たず家も立たずと云わば、女子なくしては亦国家あるべからず、孰れを重しとし孰れを軽しとすべきや、吾々の目を以てすれば何様に見てもその間に輕重貴賤の差別あらんと思われず。」 (P. 60)

3. かくるに我が國では婦人は男より、はるかに劣っている。 (P. 59)

4. 儒者の教を、曰く女大男子、では婦人は劣るもの、役に立たない。 (P. 59)

5. 婦人の心様の悪き病は和き順わざると、怒り恨むと、人を誘ふと、物如むと、智慧淺きとなり。この五の病は十人に七、八は必ずあり。是れ婦人の男に及ばざる所なり。自から顧み戒めて改め去るべし。中にも智慧の淺き故に五疾も発る。女は陰性なり、陰は夜にして闇し、故に女は男に比るに愚にて、目の前なる然るべき事をも知らず、又人の誘ふべき事をも弁えず、我夫我子の災となるべき事をも知らず、科もなき人を想ひ怒り呪ひ、或ば人を妬み憎みて我身ひとり立んと思えど、人に憎まれ疎まれて、皆わが身の仇なることを知らず、最はかなく淺まし。子を育れども愛に溺れて習わせ悪し。斯く愚なる故に何事も我身をへりくだりて夫に従うべし。」 (P. 62)

4. 儒者の教を、曰く女大男子、では婦人は劣るもの、役に立たない。 (P. 59)

5. 婦人の心様の悪き病は和き順わざると、怒り恨むと、人を誘ふと、物如むと、智慧淺きとなり。この五の病は十人に七、八は必ずあり。是れ婦人の男に及ばざる所なり。自から顧み戒めて改め去るべし。中にも智慧の淺き故に五疾も発る。女は陰性なり、陰は夜にして闇し、故に女は男に比るに愚にて、目の前なる然るべき事をも知らず、又人の誘ふべき事をも弁えず、我夫我子の災となるべき事をも知らず、科もなき人を想ひ怒り呪ひ、或ば人を妬み憎みて我身ひとり立んと思えど、人に憎まれ疎まれて、皆わが身の仇なることを知らず、最はかなく淺まし。子を育れども愛に溺れて習わせ悪し。斯く愚なる故に何事も我身をへりくだりて夫に従うべし。」 (P. 62)

4. 儒者の教を、曰く女大男子、では婦人は劣るもの、役に立たない。 (P. 59)

5. 婦人の心様の悪き病は和き順わざると、怒り恨むと、人を誘ふと、物如むと、智慧淺きとなり。この五の病は十人に七、八は必ずあり。是れ婦人の男に及ばざる所なり。自から顧み戒めて改め去るべし。中にも智慧の淺き故に五疾も発る。女は陰性なり、陰は夜にして闇し、故に女は男に比るに愚にて、目の前なる然るべき事をも知らず、又人の誘ふべき事をも弁えず、我夫我子の災となるべき事をも知らず、科もなき人を想ひ怒り呪ひ、或ば人を妬み憎みて我身ひとり立んと思えど、人に憎まれ疎まれて、皆わが身の仇なることを知らず、最はかなく淺まし。子を育れども愛に溺れて習わせ悪し。斯く愚なる故に何事も我身をへりくだりて夫に従うべし。」 (P. 62)

「そもくその病の原因は何れの辺より来りしものなるやと尋れば、吾くは矢張り儒者流の教の内在りと云わざるを得ず。今その教を享したる女大男子全部の大意を挙れば凡そ左の如し。云く、女は朝早く起き夜おそく寝て、昼寝は無用なり、酒も茶も多く呑むべからず、歌舞伎、小唄、浄瑠璃などは一切見聞すべからざるのみか、年四十歳になるまでは人の群集する宮寺へも行くとべからず、又夫の朋友その外年若き男へは容易に言葉をも交ゆべからず、度々親の方へ行くは宜しからず、況んや他人の家に於てをや、夫の許なければ何方へも出ることは無用にして、文通も相成らず、饋ものも相成らず、又女の身の衣裳は穢すして潔ければ夫れにて十分なり、染色模様など時めかして人の目に立つは甚だ宜しからず、又婦人は別に主君なし、夫を主人として都てその下知に従い聊も叛くべからず、女は夫を以て無上の天として崇め尊ぶべきものなり、又女の七去は舅姑に順わざれば去り、子を産まざれば去り、淫乱なれば去り、吾氣深ければ去り、悪しき病に罹れば去り、多言なれば去り、盜む心あれば去るとして、夫の自由在に之を退出すこと甚だ易し。」 (P. 63, 64)

6.

「知」を以て 家と國の基礎にすべし。

・ 福澤は男が女等にモエウク一天一神制家族の基礎に

「知」の教を以て置キテ、然「知」は翻譯「文明思想」の果
洋思想へ、着陸点である。「知」の思想は、漢に「知」の思想
に発展する。

ともあらん、怒り恨むこともあらん、又説く妬むこともあらん、その本を尋れば男子
の方より無理を仕向けて、正しくその結果に生じた者なれば不思議なる事にあらず。然るに
事の本をば吟味せずして唯その人を咎るとは何と法外千方ならずや。馬を飼うて粗末に之を取
扱ひ自然に意地の悪るくなりたるを見てこの馬は悪馬なりと云うに異ならず。意地の悪るきは
馬の性質にあらずして飼方の無情なるより出来たる禍なり。

(P. 65)



「元來儒者の教と云い、又この教を翻譯したる日本の女大学などにも、その作者翻譯
者を尋れば何れも皆男にして、この男は同時代一國中の男のために便利なる工風のみを運らし
て、女の不利には少しも顧着することなく、思ひさまに教を定めたるものにして、之を變え
ば下戸の相談に酒屋を擯けて餅屋を呼び、上戸の集會に酒宴の發議多數を得るが如し。」

(P. 66)

男が原因「五病」の結果

口. 儒者の教え(女大学)批判: 男が男のためにつくつたもの。

日なり、女は陰にして地なり月なりとて、一方は貴く一方は賤しき者のように説を立て、之
を自然の道理として怪しまざるもの多しと雖も、本來陰陽とは儒者の夢話にして何も取留めた
る者あるに非ず、数千年前、無学文盲の時代に天地間の万物を大略見渡し、何か似寄りのもの
二個ありて、その一つの物が強く盛に見え、相手の一つは弱く静に見ゆれば、此れは陽なり其
れは陰なりと勝手次第に名を附けたることなり。例えば天地を見れば天井と豊との如く似寄り
のものにして、一方は低くして足もて踏み、一方は高くして手も届かず、故に天は陽なり地は
陰なりと云い、日月共に円くして光り、一方は熱くして大に燿き、一方は燿けども少しく暗し、
故に日は陽にして月は陰なりと云う位の事にして、今日より考れば小児の戲言たるに過ぎず、

(P. 63~64)

1. 陰陽説 批判: 小児の戲言にすぎない

5. 「五病」(婦人の男に及ぼす所の)の原因批判

